豊後府内のキリシタン教会と附属病院の発展と消滅

髙田重孝

（改訂・2018 年 2 月 21 日）

1555 年（弘治元）9 月 20 日、アルメイダ、日本【平戸】に到着後、豊後に向かう

デュアルテ・ダ・ガーマの船に乗って、ポルトガル人の医者で商人のルイス・デ・アルメイダ（Luis de AImeida・1525〜1583）が平戸に着いた。アルメイダは修道士になって神に仕えるため、布教地として日本を選んだ。アルメイダは、治安の悪い所を 3，4 日掛かってガーゴ神父のいる豊後府内に到着している。アルメイダが豊後府内に着いたことを知らされたトーレス神父は、アルメイダがイエズス会に入会するにあたって、豊後教会の責任者であるガーゴ神父に対して、アルメイダに厳しい心霊修行を課すように命じ、その後イエズス会に入会を許可している。

アルメイダ、豊後府内に孤児院をつくる

1555 年、晩秋の頃、イエズス会に入会後、アルメイダは豊後府内で行われていた嬰児殺しの悪習を止めさせることであった。そのために孤児院の設立を領主である大友義鎮に願い出ている。

『この国民の間に行われている悪事の中に、子供を育てる辛労、または貧困のため出産直後に赤子を殺す悪習がある。本年、ルイス・アルメイダというポルトガル人が府内に来て住院に引籠り、イエズス会士になるための試練を受けていたが、この話を聞いて心を動かし千クルサドを投げだし、育児施設をつくりたいと太守大友殿（大友義鎮・後の宗麟）に言上した。何人も嬰児を殺してはならぬ、子育てができない場合はこの施設につれてくるように命令書を出してくれと請願した。大友殿は快く賛同した。この施設には貧しいキリシタンの乳母および二頭の牝牛、その他必要な設備をととのえ、孤児たちが栄養失調で死亡しないように配慮した。』
＊ガーゴ神父の書簡

豊後府内で活動を始めたアルメイダが、まず手掛けたのは孤児の収容施設だった。孤児院の運営はミゼリコルジア【慈悲の組】の組織で行われた。この孤児院はイエズス会が日本で初めて設けた社会福祉施設である。しかし、昼夜兼行で奉仕作業に従事したミゼリコルジアの男性組員たちの苦労もつのり、折からの冬の寒さも加わり、嬰児に下痢の症状が続発してアルメイダを悩ましたようだ。約 1 年後に、この孤児院は廃止され、それに代わって病院が創設された。

『デュアルテ・ダ・ガーマの船に乗って日本に向かったポルトガルの青年（アルメイダ）は、4，5 千クルサドの財貨を所有し、ラテン語にも相当通じているが、イエズス会の創造主に動かされて日本に留まり、自費を投じて病院を建設し、まずしき病人を収容し、大いなる慈愛を持ってこれを治療している。』＊1556 年 1 月 7 日付け　マラッカ発、ルイス・フロイスの書簡

『本年【1555 年】当地（豊後府内）に留まることになったルイス・デ・アルメイダは、豊後の“ 慈悲の聖母の住院 “ Nossa Senhora da Piedade のため貧者たちの病院を寄付した。』
＊ガーゴ神父の書簡

豊後府内に定住したアルメイダは、先ず孤児の収容施設をつくり、その施設の運営に困難を感じながらも全力を尽くしたが全てにおいて無理があり止む無く廃止を決断した。その後社会不安の中で見捨てられた多くの病人たちの面倒を見ながら病院の必要性を痛感して、病院設立の準備に没頭した。孤児院は廃止したが、教会あるいは住院を診療所・仮設病院としてアルメイダは医師として治療を続けていた。

山口の教会が戦火のために消滅、教会本部を豊後府内に移す

1556 年 5 月

豊後府内の教会は、領主・大友義鎮の保護もあって 1554 年から 1556 年までにガーゴ神父とイルマン・フェルナンデスの働きによって大きく進展していて、周辺の町と村の信者の数は千人を超えていた。1556 年 5 月、トーレス神父は府内に到着した時には重い病に罹っていた。山口での 5 年の活動の実りを毛利元就によって潰されるのを見るのは辛かった。府内でしばらく静養を取った後、新しい府内の地でトーレス神父は教会活動と新しい宣教師の育成を続けた。

ロレンソ、パウロ・キョウゼン、アルメイダ、イエズス会に入会する

ザビエルが最初のキリシタンに洗礼を授けたが、トーレス神父は初めて日本人をイエズス会に引き受ける人となった。府内に於いてトーレス神父は 3 人をイエズス会に迎えた。盲目の琵琶法師だったロレンソ、大和の国の多武峰という有名な寺の僧侶で医者のキョウゼンとポルトガル人のルイス・デ・アルメイダの 3 人。トーレス神父は管区長ではなかったので、教会法ではイエズス会に入会を許可する権限を持っていなかった。実際にはトーレス神父が彼らの入会を許可し、2 ヶ月後の 7 月に府内に到着したメルキオール・ヌニェス（Melchior Nunes）管区長が、トーレス神父が許可したことを承認した。
ロレンソの名前は、名簿の一番初めにある。ロレンソのイエズス会入会の日は記録されてないが、比叡山への旅の前であった。パウロ・キョウゼンもまた山口における新しい改宗者である。大和の国（奈良県）多武峯の修行僧で仏教の教義についての豊かな学識を持ち、難行苦行をしたが満足が得られずに、京に出て漢方薬の学びを深めて五畿内では良く知られた高名な薬師だった。ルイス・フロイス神父はキョウゼンのことを『日本の（仏教）宗派のなかでもっとも学識がありかつ第一級の医者であった』と紹介している。
アルメイダの入会については、トーレス神父自身が 1557 年の書簡の中で『ここ（府内）で私は『人の病を癒す力』を有する一イルマンの入会を受け入れました。』と確認している。
＊Bourdon, “Uma carta inedita”,　p.197,

7 月初旬、日本とインドのイエズス会管区長・メルキオール・ヌニェス府内に到着する
1556 年 7 月初旬、フランシスコ・マスカレーニャスの船が府内に入港して、管区長メルキオール・ヌニェス（Melchior Nunes）とガスパール・ヴィレイラ(Gaspar Vilela)神父、および二人のイルマン，ギリェルメ・ペレイラ（Guilherme Pereira）、ルイ・ペレイラ（Rui Pereira）が到着した。この中の 5 人はゴアのコレジオの学生たちだった。彼らはポルトガルからきた孤児で、ゴアの修道院で教育を受け、言葉を覚えるにはもっともすぐれた素質と音楽の才能を持ち、グレゴリオ聖歌と『オルガン伴奏歌唱』に、もっとも習熟した人たちであった。彼らの選抜の基準はまさに典礼的音楽の才能であった。

11 月　教会活動の再開
1556 年 7 月初旬に豊後府内に来たフランシスコ・マスカレーニャスの船は 3 ヶ月余り府内に停泊していた。管区長メルキオール・ヌニェス（Melchior Nunes）は自分が乗ってきた船に乗ってマカオに帰って行った。トーレス神父の補佐を始めたヴィレラ神父は『11 月に私たちは説教やそのほかの仕事を続行し始めました』と報告している。
＊Cartas Ⅰ, 54v.
＊1557 年 10 月 29 日付け　平戸発、ガスパル・ヴィエラ神父の書簡
『16・17 世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第Ⅰ巻 251 頁

アルメイダ、病院のための土地の購入と新病院の建築

『**1556 年の秋（11 月頃）**ヌニェス神父たちが豊後よりインドに帰帆してからは府内もようやく静穏になりました。（中略）そこで、私たちは大友殿から広き良き地所を購入しました。この土地の中には、もっとも良き杉材で造られた数軒の家もありました。』
＊1557 年 11 月 7 日付け、コスメ・デ・トーレス神父の書簡、

トーレス神父はアルメイダと相談して、病院設立について具体的行動にでた。ヴィエラ神父とフェルナンデス修道士が朽網地方の伝道から帰ると、この二人とも相談して、日本語の上手なフェルナンデス修道士に病院設立の計画を大友義鎮に説明させて許可を得て、府内教会所属病院設立を決定して直ちに実行に移している。

最初の府内教会の建物は大友義鎮から与えられた土地に、1553 年 6 月 11 日『住院および礼拝堂を建て､直ちに高き十字架を一基立てた』(ガーゴ神父書簡)住院と教会兼用の建物であった。病院建設のため 1556 年（弘治 2）秋、教会に隣接する一段高い広い土地を大友義鎮より購入して、そこに改めて聖堂を新築した。元居た低い土地の教会として使用していた建物は、増改築して府内病院の病棟として使用した。
旧府内教会に使用していた建物を増改築して病院とした『大きな家』（ヴィエラ神父の書簡）

は二つに区切られて、一方が癩患者用病棟もう一方が通常の内科・外科用病棟として使われた。**病院の西側の一部は病院で亡くなった人々の*墓地として使用した。**この墓地は 2001 年からの大分県の中世大友府内町跡発掘調査で存在が確認されて、場所も特定され明らかにされた。

中世大友府内町跡発掘調査から

イエズス会史料によれば、1553 年（天文 22）に初めて建設された豊後府内の教会の敷地内にすでに墓地が設けられたとの記述がある。イエズス会は 1556 年（弘治 2）に、隣接する敷地を新たに購入して、1557 年（弘治 3）に当所の敷地を病院と墓地に 2 分している。教会と病院の敷地内の墓地は初めから一貫して教会敷地内に存在していた。

『府内古図』が伝わっていて、その古い地図によれば教会のあった場所は、大友館の背後にあたり、寺院が集中する南北街路に面して『ダイウス堂』と記載された敷地がある。その場所はイエズス会の記述の場所と一致している。現大分市顕徳町付近である。

2001 年（平成 13）3 月、JR 大分駅の高架化に伴う中世大友府内町跡の発掘調査で、教会跡推定地の発掘調査が行われた。JR 日豊本線線路下から、1 基の墓が発見された。頭を北に向け仰向けに足を延ばし伸展葬の人骨が、長方形の木管に納められていた。その後この周辺から合わせて 18 基の墓が発見され、教会の墓地の一角と断定された。この墓地の位置は教会推定地の南端にあたり、調査が進むにつれて 1590 年代の地層で覆われた 1500 年後期の埋葬であることも判明した。この発掘調査の結果、墓地の継続時期がイエズス会の史料からわかる教会の存続期間と一致すること、古図研究に基づく教会推定地と発掘された墓地との位置が一致することから、発掘された墓地は豊後府内のイエズス会府内教会の敷地内に設けられた墓地の一部と断定された。

新病棟の増築

1559 年（永禄 2）7 月 1 日

旧府内教会を増改築して府内病院とした建物に並んで、石の基礎の上に大きな木造の新病棟を新築した。旧病棟の一角は外科専用の治療室として使用した。内科は新築の建物に移動した。新病棟は、中央に廊下があり、廊下の両側左右に 4 部屋あり、各部屋にはそれぞれ戸が付いていて 16 人の患者を収容することができる洋風の建物であった。

二つの並んだ大きな病棟の近く（おそらく北側）に、病人の世話をするミゼリコルデア・慈悲の組の人々、助手のための住宅があった。さらに『病院の周囲には 12 人の既婚者が住んでいて、またひとつの小屋には若干の未亡人が住んでいた』（フェルナンデスの書簡）。病院の従業員の家も数軒あった。

病院と病院に付属する建物の建っている低い方の地所と、一段高い地所に聖堂・教会堂が建ち、その聖堂の奥に、高い樹木と竹林に囲まれた地所に、トーレス神父および宣教師たちの住院があった。

府内病院の発展と評判

府内病院は設立当初は、府内の町、およびその周辺の巡回診療を行っていた。次第に府内病院の名声が高まるにつれて、その名声は京都、堺、比叡山まで伝わり、府内病院の名声を聴いて遠くは五畿内からわざわざ旅をして診療を受けにくるようになった。
1559 年（永禄 2）の夏から秋にかけて，内科および外科での治療を受けた人々は 200 人を超えた。（ガーゴ神父の報告）
1559 年（永禄 2）の病院の増築以後、府内病院は病院全体で約 100 名を超す入院患者を収容する能力があったようだ。癩病棟には常時 30 名ほどの癩患者を収容していて治療を施していたようである。
1562 年（永禄 5）には、『毎日治療を受けにくる患者のほかに、府内病院には 100 名を超す入院患者がいる。』（サンチェス修道士の報告）

【お断り】
現代において『癩病』という文字や言葉は人権上の問題から差別用語として使用しないことになっていて、それに代わって癩菌の発見者の名前に因んで『ハンセン氏病』と呼ぶことになっている。この論文で私があえて癩の文字を使用したのは、イエズス会の史料と日本の過去の史料を使用するにあたって、癩をハンセン氏病と置き換えて表現することは、当時の史料的見地からと文字や語感の上から、当時 1550 年代の初期のキリシタンの活動における癩病とのかかわり方の真相を伝えにくいと判断したからであり､その点をご容赦願い理解していただきたい。

府内病院の癩病棟

この時代、日本の諸宗教（神道・仏教）が癩に対して冷酷非情であったことは、中世の癩患者にとってこの上ない不幸であった。日本では古来の民俗信仰として清浄（ハレ）と不浄（ケガレ）の思想が伝承されてきた。これが神道と結びつき、神の祭事において不浄なものは忌み嫌われた。癩はその病状の形相からも不浄なものとされ、いつしか『天罰・天刑』神の怒りによって発病するものと思われてきた。その裏には『不浄観』思想があった。6 世紀に日本に伝来した仏教は、奈良時代まで癩患者に対して救済の手を差し伸べる僧や寺院もあったが、鎌倉時代末には、仏の教えを軽視、蔑視するものは仏罰として癩に罹るという癩観が形成された。
中世末期には、癩を発病することは神仏の怒りによる罰の現われであるという思想が広く一般に定着した。この時代の武士の起請文にも、後のキリシタン禁教令の後、キリシタンが棄教する際にデウスに誓約する棄教の請文『南蛮誓詞』にも『もし誓言を違えば癩病・白癩、黒癩に身を被っても甘んじて受ける』という文言があることは、この史実を裏付けている。

『法華経』観発品第 28 には『もしこれ（法華経）を受持する者を軽笑せば、まさに世々，牙歯すき、醜き唇、平める鼻、手脚はもつれ戻り、眼目はかすみ、身体は臭く、悪しき瘡の膿血あり、水腹、短期諸の悪しき重病あるべし』と書いてある。

社会全体が生活に喘ぎ、世情は不安定極まりない時代の最中にあって、キリストの愛と福音を説き貧しい人々と共に生きることを実践し、病院を作り無料で施療をして世の中から見捨てられて蔑まれた癩に苦しむ患者たちを収容したキリスト教会は、多くの人々から驚嘆の眼で見られていた。当時の日本人の発想では到底出来ないことであったし、まして仏教・神道では癩は『天からの刑罰』として忌み嫌われていた。賢順も一人の僧として善導寺で受けてきた教育に癩病は天啓・天の与えた刑罰としての認識しかなかったであろう。しかし、賢順の知っているロレンソ了斎を始め教会の責任者トーレス神父、アルメイダ医師、親しく交際のある府内教会のキリシタンの宣教士たちは､ケガレ不浄である癩患者に対して､暖かい援助の手を差し伸べ、病人として受け入れて治療までしている。キリシタン教会が癩病患者たちを収容して治療をしている姿を見た賢順は、一人の僧として驚嘆したであろうし、己の僧としての未熟差と非力を感じ、傍観者である自分を恥じて自問したであろう。
アルメイダとトーレス神父の病院設立に許可を与えた大友義鎮（宗麟）はアルメイダの計画の中には癩病患者たちの収容が含まれていたことを知っていて許可をあたえたはずである。
自分の住む大友館のすぐそば（大友館の裏手にあたる場所）に病院の設置を認可した大友義鎮の英断と理解力、民衆に対する慈悲の深さも評価されるべきである。もし大友義鎮がこの病院の設立に許可を与えなかったら、府内病院も癩病棟も施設できなかったはずだからである。

癩の特効薬・大風子油

大風子油とは，イイギリ科のインドネシア原産の高い木で，その果実の種を絞って取った油。
当時、大風子油は癩病の特効薬として塗薬として用いられていた。インド及び南洋諸島において癩病塗布薬として広く使用されていた。アルメイダは南洋諸島での医師としての経験を通して大風子油の効用を知っていたので、高価な大風子油を輸入によって取り寄せて府内病院でも癩病の塗布薬として使用していたと考えられる。
また病人用の葡萄酒、オリーブオイル、椰子油等、当時日本では手に入れることができなかった薬用品が府内病院では使かわれていた。輸入した貴重品であるこれらの物を、府内教会では無料で治療する際に使用した。

癩病は長い年月に渡り主に知覚神経と運動神経が侵される病で、表面的には、顔面は無残に変貌して鼻や耳が崩れ落ち､手足の指もなくなり､歩くことも言葉を発することも不自由になり，徐々に視力も失って盲目となる者も多く、その苦痛と悲惨は想像を越えたものがあった。これら癩に侵された重い障碍者たちを病院に収容して施術をすることは、病院側にとっても大きな負担であったことが察せられる。
当時の癩患者の多くは飢餓に瀕した栄養失調状態の人々であり、アルメイダは癩患者に栄養価の高い食事を与え、精神面でのキリスト教的看護を行っているので、治療効果が著しく上がったと思われる。

ヨーロッパでは、キリスト教の布教活動が盛んになるとともに、宣教師たちはキリスト教が愛の宗教であることを癩者の看護を通して実践立証してきた。12 世紀、イタリアのアッシジの聖フランシスコの例は特に有名であるが、13 世紀頃には全欧州のキリスト教国では 1 万 8000 の癩病院があったと言われている。キリスト教において癩病は特殊な病ではなく、一般の病のうちで最も悲惨な伝染病として隔離はしたが、癩という疾病に対して大きな差別感はなかった。日本に来たキリスト教各派の宣教師たちが、日本各地で苦しんでいた数万の癩患者たちに対して、キリストの愛と救済の手を差し伸べて救癩活動の先頭に立って献身した歴史的事実を忘れてはならない。1614 年以後、迫害が激化した時、癩病院の中に宣教師たちは身を潜めて、献身的に看護をしながら宣教活動に従事した。或る宣教師は看護の過程で自らが癩に罹ったが、自分の命を顧みずに看護を続けて神に召された。或る宣教師は癩患者と共に逮捕され殉教した。

府内病院の医療従事者たち

アルメイダ病院長（Luis de Almeida ）

アルメイダは 1546 年 3 月 30 日付け、ポルトガル国王ジョアン 3 世より、当時のポルトガル全領土（植民地も含む）における外科施術の教授の免許を下付されていた。アルメイダは正式に医学の勉強と研修を積んで国家試験に合格した外科医だった。ルイス・フロイスが『日欧文化比較』（大航海時代叢書）の中で『我々の間では医者は試験を受けていなければ、罰せられ、治療することはできない』と述べているが当時ポルトガルでは医師の国家試験制度があった。
アルメイダは外科が専門と言っても、府内病院では内科の分野でも活動して大きな役割を果たしていたことは、多くの報告書から読むことができる。

パウロ・キョウゼン・内科医

大和の国（奈良県）多武峯の修行僧で仏教の教義についての豊かな学識を持ち、難行苦行をしたが満足が得られずに、京に出て漢方薬の学びを深めて五畿内では良く知られた高名な薬師だった。ルイス・フロイス神父はキョウゼンのことを『日本の（仏教）宗派のなかでもっとも学識がありかつ第一級の医者であった』と紹介している。
キョウゼンは優れた漢方の医者で、薬学や医学について書かれた中国の本を読んで解読して、それを基にして作る処方､薬の効能は日本に滞在している中国人の間でも評判になる位だった。府内病院で治療のために使用する薬の大部分が漢方薬で、アルメイダを始め、ポルトガル人宣教師も漢方の使用法を学んでいる。パウロ・キョウゼンの処方する漢方薬は良く効いたため、府内病院での患者の回復率は高かった。パウロ・キョウゼンは内科医として献身的に働き、府内病院での内科診療に留まらず、病院の仕事が終わり次第、病院に来られない重症患者のために晴雨にかかわらず郊外にまで往診に出かけた。往診には馬を使い、漢方薬の入った薬箱を馬の両側に乗せて、ミゼリコルジアの組員が 2，3 人付き添って、府内周辺を往診した。キョウゼンはこの頃持病の結核が悪化したようで、結核がパウロ・キョウゼンの死因になった。
亡くなる前、毎夜遅くまで『熱性万病の漢方療法』の著述を続けていた。府内病院が開院して

10 ヵ月後の 1557 年（弘治 3）9 月に亡くなった。パウロ・キョウゼンの死は『清き終焉を遂げた』とイエズス会年報に記録されている。
キョウゼンの死後もポルトガル人の間では日本の漢方の医者（パウロ・キョウゼン）の処方する薬の評判は高かった。パウロ・キョウゼンは傷寒病等、熱性疾患に対する漢方療法で、特に解熱、鎮痛，止痢等の疾患に効く漢方の処方が得意だったことが、残されている記録から判る。熱帯特有のマラリア熱や三日熱等で発熱した豊後に滞在している船員やポルトガル商人たちから感謝されている。
『すでに死の床にあったパウロ修道士は数種の薬の処方と医学書の解説（『熱性万病の漢方療法』）を続けて行っていました。彼が病死して後・・・トーレス神父はパウロ修道士の処方したこれらの薬を使用することにしましたが、中国から来たもので用いやすく効能は大きかった。そのうちのある薬は、三日熱、四日熱その他の病に用いて即効がありました。ギリェルメ・ペレイラ船長とその船の乗組員一同が病気になり、豊後に来航した時、この薬でもって治療しましたが、全員が全快しました。それで中国に持って帰る者もいましたが、その効能を認めてどうか薬を分けてくださいと、しきりにトーレス神父に頼んでいました。』
＊1559 年 11 月 1 日付け　ガーゴ神父の書簡

トマス・内田・内科医

トマス・内田は 1557 年（弘治 3）4 月、毛利元就によって、山口の大内義長が自害した後、山口の町が毛利軍により焼失破壊された時、山口に残っていたキリシタンたちは豊後への移住を余儀なくされた。この時、山口の住院教会の祭具，2 枚の聖絵等を背負い豊後府内まで逃げてきた。トマス・内田は日本におけるキリシタン信者の第一番目の信者であった。トマス・内田は、自分の息子をイエズス会に受け入れてくれるようにこの時に願っている。
ルイス・フロイス神父はトマス・内田のことを『パウロ・キョウゼンに代わって気のどくな人びとに奉仕するために病院に赴きました。』と書いている。
アルメイダは『先に死亡したパウロ・キョウゼンに代わって山口より府内に来たトマス・内田が内科治療を行い、大いにデウスに仕え、住院にとってははなはだ必要な人になりました。』と書いている。トマス・内田はもともと山口で医者をしていたと考えられるが、府内に来て、アルメイダの指導のもと、パウロ･キョウゼンの漢方の処方の指導も短い間だったが受けていた。パウロ･キョウゼンの死後、キョウゼンが残した漢方薬の処方に関する『熱性万病の漢方療法』を学んで、独自の漢方療法を確立して府内病院の内科医として活躍した。

殉職したミゲルと二代目パウロ

パウロ・キョウゼン内科医のもとで内科に勤務していたミゲルという若い日本人青年がいた。ミゲルはパウロ・キョウゼンの指示で漢方の調剤助手の仕事をしていたが、激務のためか悪い感染病にかかったのか、パウロ・キョウゼンの死後一ヵ月後の 1557 年 10 月に死亡した。

二代目パウロは､病院設立当時からパウロ･キョウゼンの許で学び働きを共にしていた青年で、パウロ・キョウゼンから直接の指導を受けていた。当時、年が若く医師としての経験もないために、薬剤調合の仕事に従事していたと考えられる。パウロ・キョウゼンの死後、トマス・内田の指導下に入り、病院での勤務に従事していた。パウロの入会の日付けは 1557 年のヴィエラ神父の書簡に『彼（パウロ）は 24 歳の青年で、誓願を立ててイエズス会のイルマンとして入会を認められた。』
＊Cartas Ⅰ, 56.　＊1557 年 10 月 28 日付け　ヴィレラ神父の書簡

フェルナンデス修道士は『パウロは医者で、まったくの無給で、われわれや日本人の信者、それに仏教徒たちのために必要な薬の調合を行っています。この日本人は医術に精通した人ですが、年がまだ若いのでトーレス神父は住院にいる老医師（トマス・内田）の意見を聞いてから何でも行うように命じています。この老医師がキリシタンや仏教徒たちの病人の脈をとり、その指示でパウロは病人に投薬しています｡』
＊1561 年 10 月 8 日付け　豊後発　フェルナンデス修道士の書簡
二代目パウロも『開院 1 年半後、病院勤務に倒れ清き終焉を遂げた』とガーゴ神父の 1559 年の書簡に記録されている。

デュアルテ・ダ・シルヴァ（Duarte de Silva）

府内病院において常にアルメイダの補佐をしていたシルヴァはポルトガル出身のイルマンで、1550 年インドでイエズス会に入会して、1552 年 8 月 14 日、第 2 次日本伝道団の一人として豊後府内にきた。非常に真面目で勤勉家であり、日本に来たイエズス会士の中では、フェルナンデス(Juan de Oviedo Fernandez)に次いで日本語に堪能だったと記録されている。堪能な語学力を駆使して病人と医師との意思の疎通を良くして、アルメイダからも医学の知識を学び府内病院の外科治療に貢献した。**1562 年**、イエズス会本部が肥前横瀬浦へ移転したことで、府内教会には 3 名の修道士デュアルテ・ダ・シルバ、ギリェルメ・ペレイラ、アイレス・サンチェスが駐在することになった。3 名の修道士の指導のもと、府内教会は一教会としてその敷地と施設、病院と慈悲院等を維持していたと思われる。**1563 年**、ジョアン・バプティスタ・デ・モンテ神父が府内教会の責任者として赴任してきた。イルマン、デュアルテ・ダ・シルバは 1560 年にもたらされたイエズス会の『医療禁止令』に従い、1563 年以降は宣教師として肥後の川尻（現・熊本市川尻）へ派遣された。そこでも布教のかたわら近くの寺の仏僧について漢字を学んでいる。シルヴァは布教上必要と感じた『日本語の辞典と文典の草稿』を執筆していた。1564 年 4 月、シルヴァは重い病に罹った。アルメイダは激しい雨に中を数日間歩き通して川尻に着いたが、シルヴァの命は消えかかっていた。天気が回復するとアルメイダはシルヴァを船に乗せて有明海を上りトーレス神父のいる高瀬（現・玉名市高瀬）に運び、トーレス神父と共に付き添って看護したが、数日後、シルヴァはすべての秘跡をトーレス神父から受けたのち若い命を神に捧げた。1564 年 4 月 30 日、日本で最初に亡くなった宣教師となった。 シルヴァの墓

は現在も玉名市伊倉北方にある。カマボコ型の小さな墓碑の正面には美しい花十字が彫られている。シルヴァの遺髪も残されている。
アルメイダは、イルマン・デュアルテ・ダ・シルヴァについて美しい言葉を送っている。
『このイルマン・デュアルテ・ダ・シルヴァはそれまで私が見たことのないほど熱心な人物で、飲食も忘れて夜昼説教をしたので、その激しい仕事のために病気になりました。彼が一時間何もせずにいるのを、私たちは決して見たことがありません。だからこそ彼は日本の文字（仮名）だけでなく、非常に難しい支那の文字（漢字）さえも知るに至ったのであります。彼は日本の文法を考案し、日本語の豊富な語集を作成しました。そのために、布教に対する彼の強烈な熱意は、彼の弱った体には耐えられない過労を彼に強いました。』

玉名市伊倉北方にあるシルヴァの墓のある墓地を代々管理されてきた、旧家中山家に代々伝わっている『シルヴァの遺髪』と言われている小さな束にされている茶褐色の髪がある。中山家は先祖代々、秘かにキリシタンの信仰を守りながらこの遺髪を伝えてきた。病気にかかったときなど、この遺髪を病人の体に触れさせて祈祷すると不思議な効力が現れて癒されると語り継がれ、明治から大正・昭和初期までそれが実行されていた。伊倉北方の中山家の檀家寺の過去帳を調べると『中山家古文書キリシタン類族除帳』等から隠れキリシタンがいた証拠が残されていた。
『南蛮医アルメイダ』を著された東野利夫氏がこの遺髪を借り受けて九州大学医学部法医学教室の永田教授に鑑定を依頼。永田教授から『電子顕微鏡などの所見を総合した結果、この髪は確かに数百年（約 400 年前後）を経過したかなり古い人毛で、色素などの状態から考えて西欧系（黒褐色）の外国人の者であろう。血液型は B 型』との報告を受けている。
現在『シルヴァの遺髪』は玉名市立歴史博物館こころピアに預けられ保管されている。

【初公開】資料提供　玉名市立歴史博物館こころピア

中山家（玉名市伊倉）に伝わる「バテレンの頭髪」

玉名とキリスト教

16～17 世紀にかけてヨーロッパ人の世界における航海・貿易・植民地活動の発展は目覚ましく、「大航海時代」が到来した。日本には、天文 12 年（1543）ポルトガル人が種子島に漂着し、鉄砲を伝えた。天文 18 年（1549）には、フランシスコ・ザヴィエルが鹿児島に上陸。日本におけるキリスト教伝道が始まった。
豊後国（大分）の領主、大友宗麟は当初からキリスト教に興味を持ち、ザヴィエルを招き西洋事情を聞き、西洋文化の流入と貿易の利を得るため、キリスト教の保護を進めていった。天文 12 年（1543）大友義鑑は、肥後国守護となり、さらに家督を継いだ大友宗麟は、永禄 2 年（1559）肥後・筑前・筑後・豊前・日向を加え、六ヵ国の守護となった。

高瀬（現玉名）は大友氏の支配の及ぶ地域であり、下（しも）と呼ばれた西九州の布教地（横瀬浦・口ノ津・島原）と豊後府内を結ぶ交通の要衝であった。宣教師の往来は頻繁で、コスメ・デ・トルレス司祭（のちの第二代布教長）やルイス・デ・アルメイダ修道士、デァルテ・ダ・シルヴァ修道士などの宣教師たちが訪れた。

シルヴァ修道士の死

コスメ・デ・トルレス（1510～70）は、フランシスコ・ザヴィエルが日本を去った後の、布教長を務め、イエズス会の日本布教の中心的存在であった。トルレスらは永禄 6 年（1563）11 月横瀬浦の受難を逃れて、数ヶ月間高瀬に滞在し布教を進めた。

デァルテ・ダ・シルヴァ修道士（？～1564）は、布教のため 1563 年、高瀬から河尻に派遣されていたが、河尻では異教徒の中にあって体が衰弱し薬も効かないような状態に陥っていた。アルメイダは、豊後府内からシルヴァを励ますため河尻を訪れた。シルヴァは、最期にトルレス司祭に会うことを願った。アルメイダは、シルヴァを船に乗せトルレス司祭のいる高瀬にともなった。シルヴァ修道士はトルレス司祭に秘蹟をうけ、10 日後静かに息を引きとった。永禄 7 年（1564） 4～5 月頃と推定される。享年 30 歳前後。

髪の毛について

初公開するこの髪の毛は、玉名市伊倉の中山家に伝来するものである。中山家では、「山姥の頭髪（バテレンの頭髪）」と伝える。「山姥」とは、日本人ではない異国人・異国の宗教に関わるものを、異形「山姥」になぞらえたものであろうか。「バテレン」とは伴天連、宣教師の意であり、この髪の毛は、玉名を訪れた宣教師、永禄 7 年（1564）玉名で亡くなった宣教師シルヴァのものではないかと言われてきた。

伝来してきた中山家では、戦前まで 4 月 30 日に親族一同で先祖を供養する先祖祭り（歳の神祭り）が、シルヴァの没日頃（4 月か 5 月初めとされる）に催され、体の悪いところをこの髪の毛で撫でてもらえば快くなるという言い伝えも残っている。さらに近くの中山家の墓地には、県内でも数例しか例を見ない正面に美しい花十字を刻んだ蒲鉾形のキリシタン墓がある。

長い禁教の時代を守り抜かれ秘蔵されてきた「バテレンの髪の毛」である。この髪の毛がシルヴァ修道士のものか現段階では断定できないが、キシリタンに関わる珍しい貴重な遺物であることには違いない。

昭和６０年九州大学医学部解剖学教室において、電子顕微鏡による鑑定が行われ、以下のような鑑定結果が出ている。

１、人毛・頭髪である
２、性別は不明
３、モンゴル系・東洋系でない、ヨーロッパ人である

４、染色体のメラニン色素は自然のものである
５、一本の毛髪の破壊度は４・５００年～１０００年以内と推定される
６、血液型はＢ型である。

25 年前に一度科学鑑定はなされたが、当時の鑑定書は残っておらず、加えて近年の科学技術の進歩は目を見張るばかりである。最新技術での再鑑定が実施され、新たな事実が判明することが期待される。

デュアルテ・ダ・シルヴァ（Duarte de Silva）の遺髪
『シルヴァの遺髪』は玉名市立歴史博物館こころピアに預けられ保管されている。

アイレス・サンチェス（Aires Sanches）

アイレス・サンチェスは医療従事者の中でも音楽的才能を持ち、日本に来る前にインドのゴアで専門的に音楽の訓練を受けていた。
サンチェスは 1561 年の夏頃にゴアから平戸に着き府内にきた。『私（アイレス・サンチェス）は 1561 年平戸につき、日本に骨を埋める覚悟でトーレス神父やイルマンたちとともに豊後に滞在し、コンパニヤ（イエズス会）への入会を許された。私は今、病人の治療を行いながら日本人や中国人の少年たち 15 名に読み書きや歌、ビオラ・ダルコ（viola d'arco ）の指導をしている。少年たちの中には大変才能のある者が二人いた。14 歳のアゴスチニヨと 12 歳のジョアンである。』
＊1562 年 10 月 11 日付け　アイレス・サンチェスの書簡

サンチェスの指導した聖歌隊は長い白衣の胸に大きな赤の十字架を付けていた。
1562 年、イエズス会本部が府内から横瀬浦（肥前國松浦郡）に移って、トーレス神父が盛式誓

願をたてた時、豊後から、サンチェスに率いられた聖歌隊が参加して音楽を担当している。
1565 年、天草の志岐で、サンチェスが少年と少女の各聖歌隊が『かくも信心を込めてカント・リアノ（ cannto llano ）に調子を合わせて晩歌を歌う』と記録されている。
1568 年、アレキサンドロ・バラレジオが天草の志岐を訪れた時も『彼らはベネディクトゥスを甘美な諧調で歌いながらやってきた』と､驚きを持って少年少女の聖歌隊の姿を報告している。
1569 年、島原の口之津ではポルトガルの商人が『少年少女が教会に行く途中に、荘厳な歌を歌っているのを聴いた』と報告している。

アイレス・サンチェスの先輩に、同じくインドのゴアのコレジオで音楽の訓練を受けた 2 名がいる。二人のイルマン，**ギリェルメ・ペレイラ（Guilherme Pereira）、ルイ・ペレイラ（Rui Pereira）**である。彼らはサンチェスの 6 年前に日本に来て、府内で音楽を教え、病院で看護に従事していた。1556 年 7 月初旬、フランシスコ・マスカレーニャスの船が府内に入港して、管区長メルキオール・ヌニェス（Melchior Nunes）とガスパール・ヴィレイラ(Gaspar Vilela)神父と共に来た。イルマン，ギリェルメ・ペレイラ（Guilherme Pereira）、ルイ・ペレイラ（Rui Pereira）はその中の 5 人でゴアのコレジオの学生たちだった。彼らはポルトガルからきた孤児で、ゴアの修道院で教育を受け、言葉を覚えるにはもっともすぐれた素質と音楽の才能を持ち、グレゴリオ聖歌と『オルガン伴奏歌唱』に、もっとも習熟した人たちであった。彼らの選抜の基準はまさに典礼的音楽の才能であった。
後にギリェルメ・ペレイラ（Guilherme Pereira）はイエズス会に入会してイルマンになり、日本に永住した。布教地の典礼音楽に与えた影響は大きい。この派遣団が、ある種の経済的余裕によって準備され得たので、新布教地のために入手した書籍の中には、典礼のための本が何冊かあった。教会の発展のために有効な『グレゴリオ聖歌・canto chao 一冊、オルガン伴奏歌唱一冊である。これらは日本にもたらされた最初の典礼音楽書である。

府内病院の終焉

アルメイダによって 1555 年、晩秋の頃、豊後府内に孤児院が作られたが、孤児院は維持が難しく約一年足らずで消滅した。府内教会、住院を仮の診療所として再出発して医療活動は着実に発展を遂げ続けた。
アルメイダは 1556 年の秋（11 月頃）病院のための土地の購入と新病院の建築を大友義鎮に願って許可され、仮の診療所としていた教会や住院から本格的に病院の建物に体制を移行してより効率的に診療に従事した。府内病院の評判を聞き多くの患者が集まり、遠くは五畿内、京都や堺から豊後府内まで訪ねてくる患者もあった。
1559 年（永禄 2）7 月 1 日、新病棟の落成と増築をにして、府内病院はより一層発展した。
府内病院の発展と評判はキリスト教会にとっても素晴らしい布教の機会となっていた。
豊後の領主大友義鎮は、府内病院開設当初から許可を与えて全面的に支援してくれていた。
大友義鎮は豊後の配下の重臣たちをようやく統率できる状態になり、内政面でも豊後の治安は

良くなった。戦国の世の下剋上の争乱は北部九州でも起こり、旧大内家の豪族や、大内家を滅ぼして、北部九州にまで勢力を拡大しようとする安芸の毛利元就との間で、略奪戦が繰り返し行われた。1559 年に大友義鎮は『九州探題』の地位に就いて以降、大友家は全盛時代を迎えた。地域の安定によって豊後府内のキリスト教も発展して、府内病院も増々多忙を極めていた。

1560 年 7 月『イエズス会士により医学研究、教授、施術を禁止する決議』

1560 年 7 月、豊後府内に入港したマヌエル・メンドーサ船長がイエズス会の**『医療禁止令』**の通達を日本教区長トーレス神父に届けた。

この『医療禁止令』というのは、1558 年、イエズス会本部で行われた『最高宗門会議』で決議された『聖職者の地位にある者は人間の生命に直接かかわる医療施術，生死の判決に係わる裁判官（法律家）の職についてはいけない』という特別命令である。

『聖職者は死すべき宿命を持つ人間の魂の救済こそが真の職務であり、現世での肉体の生死に関わる医療行為や生殺与奪権をもつ裁判官になってはいけない』というのがこの禁止令の主旨であった。

イエズス会士の医療活動は禁止され、病院の全てを担っていたアルメイダ医師は、宣教師として布教活動に専念することとなった。禁止令を受け取った病院に勤務していたイエズス会士たちも医療行為から手を引きトーレス神父の指示に従い各自が与えられた場所へ赴き開拓伝道を始めた。アルメイダの修道士としての布教活動の専念に伴い、今まで繁栄をしていた府内教会の病院及び育児院，慈悲院は、府内教会員による慈悲の組・ミゼリコルジアの会員によって維持運営されるようになった。府内病院の後を託された日本人医療従事者の技術は高くなく、徐々に評判は悪くなり、病院は衰退の一途をたどった。

1560 年 7 月のメンドーサの船を最後にポルトガル船の豊後来航はなくなった。

1562 年（永禄 7）7 月、イエズス会本部、肥前の横瀬浦に移る

府内にあったキリスト教団本部は肥前の横瀬浦（長崎県西海町）に移っていった。イエズス会本部の肥前横瀬浦への移転に伴い、豊後府内在中の宣教師数もイルマン 3 名だけになり、豊後における活動は徐々に下火になった。デュアルテ・ダ・シルヴァ、ギリェルメ・ペレイラ、アイレス・サンチェスの 3 名の修道士が府内には残り府内の教会及び病院の責任を負った。

イエズス会の豊後府内から肥前横瀬浦への移転は、大村の領主・大村純忠がイエズス会に対して、新しい布教地として横瀬浦を全面的に提供して、大村純忠自身も洗礼を受けて布教活動を支援する約束が取り交わされたためであった。

横瀬浦は 1 年半の間繁栄を極めたが、1563 年 11 月下旬、短い使命を果たして焼失した。

1564 年 4 月、避難先の肥後高瀬（現・玉名市）でイルマン・デュアルテ・ダ・シルヴァ死去。

1564 年 6 月、トーレス神父、島原口之津へ移住。イエズス会の仮の本部を口之津教会に置く。

1567 年、イエズス会布教本部は長崎に移された。

第 3 期・府内教会の停滞期　（1562 年～1577 年）

1562 年、イエズス会本部が肥前横瀬浦へ移転したことで、府内教会には 3 名の修道士デュアルテ・ダ・シルヴァ、ギリェルメ・ペレイラ、アイレス・サンチェスが駐在することになった。3 名の修道士の指導のもと、府内教会は一教会としてその敷地と施設、病院と慈悲院等を維持していたと思われる。

大友義鎮入道して『瑞峯院三非斎宗麟』と号する

1562 年（永禄 5）5 月 30 日　　大友宗麟 33 歳　諸田賢順 28 歳

京都大徳寺（臨済宗大徳寺派）に塔頭（子院）瑞峯院を建立。京都の大徳寺から怡雲宗悦（いうんそうえつ）という高僧を招き、怡雲宗悦のために『臼杵の御殿と城に向かい合った』（フロイス・日本史）位置、臼杵城（丹生島・にうじま）の北側、臼杵川が流れ込む臼杵湾を隔てた対岸の北側の臼杵の諏訪山に大きな禅宗寺院を建立した。この寺が『紫野壽林寺』であり、この寺で大友義鎮（33 歳）は入道して『瑞峯院三非斎宗麟』と号する。

『壽林寺』は現在の臼杵市諏訪地区にあったことが江戸時代中期に著かれた『臼陽寺社考』等などから推定されている。壽林寺は 1586 年（天正 14）島津軍臼杵侵攻直後、あるキリシタン女性の放火によって全焼したことがフロイスの記録にある。壽林寺跡には江戸時代臼杵藩別邸が建てられていた。大友宗麟は臼杵を城下町として整備して、臼杵の丹生島に城を築き、臼杵が大友氏の政庁所在地となった。

1563 年、ジョアン・バプティスタ・デ・モンテ神父が府内教会の責任者として赴任してきた。イルマン、デュアルテ・ダ・シルヴァはモンテ神父と交代で 1563 年以降は宣教師として肥後の川尻（現・熊本市川尻）へ派遣された。府内教会は、1 神父（モンテ神父）、2 修道士（ギリェルメ・ペレイラ、アイレス・サンチェス）体制が 1574 年（天正 2）まで続いた。

1565 年（永禄 8）臼杵教会（永禄の教会）完成。

大友家からキリシタンになった人々

1574 年　2 月、宗麟、嫡男義統に家督を譲る。フランシスコ・カブラルが豊後に来る。

1575 年 7 月頃、一条兼定と夫人（大友宗麟の長女）の受洗

1575 年 11 月、大友親家（大友宗麟の次男）と宗麟の娘 2 人の受洗

1575 年 12 月、大友宗麟次男・親家洗礼を受け、ドン・セバスティアンと称する。

1577 年　4 月 8 日、老臣田原親堅の養子親虎、洗礼を受け、ドン・メシアンと称する。

第 4 期・府内教会の最盛期とコレジヨの開設　（1578 年～1586 年）

1577 年（天正 5）7 月、長崎に 14 名の宣教師が来日した。
そのうち、ペドロ・ラモン、ゴンサロ・レベロ両神父と 6 名の修道士が豊後に配置され、ラモン神父は府内の司祭館の上長に任命されている。当時の布教長カブラルは、来日前の巡察師ヴァリニャーノによる神学校開設の命令を受けて、その準備のために府内教会にラモンと多くの修道士たちを配置したと考えられる。

1578 年のイエズス会の教勢
在日イエズス会員 51 名、神父 21 名、修道士 30 名。

京都	神父 2 名、修道士 3 名
筑前博多	神父 2 名、修道士 1 名
肥後天草	神父 3 名、修道士 1 名
肥前口之津	神父 1 名、修道士 1 名
肥前大村長崎	神父 3 名、修道士 3 名
肥前平戸	神父 2 名
豊後府内	**神父 4 名、修道士 13 名**
豊後臼杵	**神父 2 名、修道士 6 名**

1578 年の時点で、豊後府内にはイエズス会宣教師のほぼ半数が居住している、その中でも府内教会には最も多い 17 名のイエズス会員が在籍している。

1578 年 7 月 25 日、大友宗麟受洗
臼杵教会で、大友宗麟は洗礼を受けて、ドン・フランシスコと称した。
宗麟の新婦人、およびその子も受洗
1578 年（天正 6）大友宗麟も、この年までは全盛を極めたが、同年 11 月、日向の高城・耳川の戦いで島津軍に敗れて以来、大友氏の勢力は急激に衰えていった。

1579 年（天正 7）、巡察師ヴァリニャーノが来日。
1580 年（天正 8）、イエズス会の日本布教組織を再編した。長崎に本部を置き、そこに日本布教長が常駐して、日本を都、豊後、下の 3 地区に分割した。豊後地区は 1580 年に新しく設置された府内コレジオ院長のラモンが就任した。

1580 年（天正 8）ロレンソ・メシア神父の豊後よりの報告に**府内病院の現状**が報告されている。**『わずかに癩に罹り遺棄された者を治療して、彼らを救助して帰依した者が教会の信徒になった』**と記載されている。**この頃には府内病院の機能はほとんど停止していたと推測される。**

1581 年（天正９）大友宗麟、臼杵に日本で最も美しい教会堂を建てる（天正の教会）

1582 年、親盛（宗麟の三男）受洗ドン・パンタレアンが洗礼名。伊東義賢（甥）受洗
1585 年、志賀親次（親善）19 歳、受洗

1586 年（天正 14）末、島津軍の豊後侵攻に伴い、臼杵の教会施設、府内の教会施設、細々と活動をしていた病院等は壊滅的被害を受けた。

府内教会の終焉

1586 年（天正 14）末、島津軍の豊後侵攻により壊滅的被害を受けた府内の町だったが、宣教師たちが退去した後の教会施設は、豊臣秀吉の使者・***木喰応其上人【興山応其上人】**の宿舎になっていたために、島津軍は火を掛けなかった。府内に入った、キリシタン武将・黒田如水孝高のとりなしにより、教会施設はイエズス会に返還され、そこにレベロ神父が入ったが、占領した豊臣軍による略奪が絶えなかった。さらに羽柴秀長の軍勢が到着して、宿舎として教会施設は接収された。辛うじて修道院と倉庫は残ったが、教会堂は破壊された。

***木喰応其上人【興山応其上人】**1536～1608 年、安土桃山時代の真言宗の僧
応其は、元は近江の武士であり、姉川の戦いに参戦、その後、戦いの愚かさと人生の無常を感じて出家した。1585 年（天正 3）秀吉の紀州攻めの時、精強な鉄砲部隊を持つ根来衆・雑賀衆が攻略され、次は高野山が目標とされた時に、高野山の客僧であった応其に全権を託されて、応其が秀吉の本陣の粉川寺へ和議に赴いた。応其は交渉に際して誠意を尽くして説得を続け、秀吉に深い感銘を与え、秀吉から信頼を受けた。応其は和平交渉の条件として、高野山の僧兵の武装解除と高野山の領地をすべて献上した。これに対して、秀吉は逆に 2 万 1000 石の寺領を高野山に認めている。このうち、半端な 1000 石は応其個人に与えられた俸禄であり、この地が本市の中心地となった『橋本』で、1587 年（天正 15）に本市の里にあった荒れた寺を再建して定住、応其屋敷と呼ばれ、この屋敷が後に『応其寺』になった。
その後、応其は秀吉により高野山を統べる人物として指名された。秀吉の生母・大政所の供養として高野山に青厳寺（後の金剛峰寺と改名）を建立し、その他の諸堂の修理、荒れていた高野山を天下の菩提所として再整備を行った。秀吉の行った土木工事のうち約百ヵ所の道路や橋、用水等の整備修復を行った。
1595 年（天正 13）『薩摩旧記雑録』には、応其が秀吉の全権使者として薩摩との交渉に大きな役割を担っていたことが記録されている。秀吉の九州征伐は、島津の九州統一を目前に、豊後の大友宗麟が秀吉に助けを求めたことに始まる。1597 年（天正 15）3 月、応其は一色昭秀と共に薩摩に最終交渉に赴いたが、交渉は決裂して、秀吉が 20 万を超える大軍を率いて九州侵攻を開始、4 月、豊臣秀長・黒田官兵衛率いる 8 万の部隊と、日向高城の根白坂で戦い、薩摩との決着がついた。この時点で、応其は一色昭秀と再度講和交渉に向かったが、降伏を潔しとはしない島津義弘は抵抗を続けた。しかし、最終的には薩摩は無条件降伏を行っている。
応其の働きは具体的な戦功として現れるものではないが、戦いの長期化での人材や物質の損失

等を考えれば、和平交渉の中での応其の役割の重さを認識させられる。

1587 年 3 月 20 日、大友義統（宗麟の嫡子）一家の受洗（中津において）

1587 年（天正 15）6 月、大友宗麟が津久見で死去。
同年 7 月 25 日、豊臣秀吉が『伴天連追放令』を博多の筥崎宮で発布。
それに伴い豊後に残っていた宣教師 3 名は長崎に退去した。この後、府内教会は放棄され、再建されることはなかった。

髙田重孝
880-0035 宮崎市下北方町横小路 5886－3
☎ 0985・25・5467 Fax 0985・22・3628 携帯 090・5933・4972
Email Shige705seiko214@outlook.jp.